

その境地に於ける精神と実践

March 18,2013 / text : 森川誠一郎 (血と雫 je prie pour que la goutte ne tombe pas)

最も重要な考えは「その人が生きてきたことの響きのようなもの」である。楽器を使って音楽を奏するという前提はあれど、何よりも大事とするのは、その人自身がグループを形成し音像を作る。という観念である。抜群な技巧演奏や音楽的に器用な捉え方は必要としていない。それらの否定ではなく、ここに於いては不要なのである。音楽を、より上手に演奏するというプロセスを求めているのではない。求心はその人間性にある各自の個性にある。それが「その人が生きてきたことの響きのようなもの」という観念と法則であると考えている。グループはそれらを集約する為の実践の場所なのである。グループ内に於いてその関わり方の信頼。例えば、ここ、またはそれは何か違うと感ずるような時に、如何にして周囲を信頼出来るかを見定め。先ずそれを中心に考えることが出来れば、自然に修正される現象が必ず起こる。その結果を正解とする。という考え方である。急速な判断を必要とする場合を除き、グループ内に存在する自然体を信ずること。これを先ず優先に考えるべきである。その観点から言えば、結果が段々と変化していくことも起こりえる。それは結果として歓迎すべきことなのである。その信頼が強くなればなる程に、楽曲に生命を宿すことが出来る。グループが生み出すもの。その為に必要な行いと意識に集中することで、自ずと自分自身にも変化が訪れる。その変化を柔軟に広げることが、信頼へと繋がるのである。

では、信頼とは何であるのか。グループとして作用する為の心身のいとなみ。他方に働きかける反作用の調和。それら全体をつつむ思考の相乗化である。ひとつの力ではなし得ない力。それは、単に楽器を奏でる能力のみを指しているのではない。グループ内で発生する各音色は相互に効果を強める。各自が主音を奏でる上での安心は、音を聴くのみならず、その背景にある人を信ずることにある。その理解と達観のあるグループは、細分化された個人が、離散と集合を繰り返す集まりとは明らかに性質が異なる。このグループの方向性はここに集約されている。その上で生み出す楽曲が、グループの音楽性であり、精神性でもある。一般的に言えば、音楽をグループで演奏する前に、特段これらの事柄を意識をしなければならぬ。と、言うことではない。他にも沢山の手段と方法はある。ここで書いていることは、血と雫に於ける成り立ちと理念であり、このグループの基本的な考え方のひとつである。それは、これまでの経験が齎した考えとも言える。「その人が生きてきたことの響きのようなもの」それは参加者の全てに基体している経験である。血と雫の動因はここに帰依していて、それを最良に生かす為の方法が、その境地に於ける精神と実践なのである。それが、最終的にグループとして最大の個性へ繋がると信じている。